

# 学校設定科目「日本文化」の単元開発

専門研修員 藤井確彦（川崎市立橘高等学校）

## 主題設定理由

### 1 学校設定科目「日本文化」について

市立橘高等学校国際科の専門科目である「日本文化」は、国語科の学校設定科目（以下科目と略す）〔2単位〕である。国際科は平成13年度に「各教科の学習及び専門科目の学習を通じて、自国及び他国の言語や文化への関心を高め国際理解を深める」という基本方針に基づき開設された。そして「豊かな国際感覚と広い国際的視野を培い、これからの国際社会に寄与する人間を育成する」という目標の下に「コミュニケーション能力の育成」「日本文化理解」「異文化理解」の三本の柱を設定した。この「日本文化理解」のために、科目「日本文化」が設定された。新たに設定された科目であるから、またその範囲の広さや内容の深さから、系統だった実践や単元教材が少ないために単元開発が必要となった。

### 2 15年度授業実施後の課題

科目「日本文化」は第3学年に設定された科目のため、平成15年度4月からの開講であった。

当初、橘高等学校国語科では、この科目の内容を「日本の文化、歴史、習慣、言語等について認識理解する」ために、「日本人の心の深層に生き続けるイメージの秘密を、説話・神話・伝説・昔話・狂言・詩歌・謡曲・ことわざ・年中行事などを通じて追っていき、歴史的に積み上げられたそのイメージが、わたしたちの生きる社会で、どのような形で残され、受け止められているのかを考察するもの」ととらえた。イメージとは、例えば5月というと「端午の節句」が思い浮かび、端午の節句というと「鯉のぼり」「金太郎」などが思い浮かぶ。では、「なぜ鯉なのか」「あの吹き流しにはどういう意味があるのか」「なぜ金太郎なのか」。日本の歴史と文化に培われてきた「何か」が、私たちの体内には植え付けられているのではないか。それをイメージの秘密と称して、明かすことで授業展開していった。その結果、次の課題が残った。

日本の年中行事などについて考察を深めると中国にたどり着き、典拠を求めると『荊楚歳時記』に集約される。ある生徒は、「日本文化の源流は中国にあることは知っていたが、日本の文化は中国の文化の模倣にすぎないのでは」という意見を述べた。一国の文化が全く他国の影響を受けずに、独自性のみ際立つような例はないにしても、自国の文化の特性をはっきりと見取ることができる題材を吟味しなければならないと感じた。

国際科の生徒に限ったことではないのかもしれないが、歴史的な知識の不足が顕著であった。例えば、「奈良・平安・鎌倉・室町・戦国・安土桃山・江戸・明治・大正・昭和」といった歴史の時代区分が認識できていない生徒が大半であった。その上で、平安と江戸の物事を時代背景も考えることなく同列に比較するような思考に陥る場面もあった。歴史的背景を意識、前提としながら、日本の文化を見つめられる題材が必要であると感じた。

様々な分野に取材したことで、1年間の単元の中で共通するものが抽象的になってしまったり、知識の切り売りになったりする場面もあり、一つのテーマで日本の文化を見つめることの必要性を感じた。

以上の三つの課題を念頭に、新たな自主教材に基づいた単元開発に取りかかった。

# 研究の内容

## 1 研究の方法

### (1) 授業実践からの単元開発

4月の授業開始時に教師が準備していた教材は、「文化と文明について」「日本という国号はいつからか」の2単元であった。「文化とは何か」「『日本』という意識はいつごろ芽生えたのか」という問題提起をするためであった。そして、「日本というところが思い浮かぶ」という問いに対して、多かった答の「桜」が題材となった。希望した生徒による発表と、生徒の発表を予想した教師が学習資料を用意しまとめるという展開で授業を進めた。「なぜ桜という名が付けられたのか」「古事記のクノハナノサクヤヒメのサクヤから」「桜は多く歌に詠まれたか」「万葉集では梅の方が多い」「平安京の紫宸殿の標木も最初は梅だった」「いつ桜に変わったのか」といった授業中における生徒に対する問いかけと生徒の研究発表、教師の自問自答のなかで相互に関連をもった題材が列挙されていった。こうして「日本」「桜」「和歌」「説話」といった単元の柱が見えてきて、それぞれのつながりを、その内容と典拠、国号の起こりまで遡った歴史を順を追って下るといった整理を、次のようにしていった。

朝貢・冊封時代から日本国へ 平安京遷都と南殿の山桜 国風文化の芽生えを予期させる古今和歌集の成立・古今和歌集仮名序にみられる和歌の理念とそれを語る説話 王朝文学最盛期の象徴、九重の八重桜 八重桜の収集家であった若き日の藤原定家と同時代の歌人たち 定家の和歌における美意識と後世の享受・伝承

### (2) 授業展開の例「月と兎」（主要資料『今昔物語集』巻五13話）

過程	学 習 活 動	指 導 内 容・留 意 点	評価観点(方法)
導入 7分	前時の学習と本時の発表の課題を確認する。発表に際して、記録・評価プリント(ワークシート)を配付され、記入法を確認する	「なぜ～なのか」という問題点をばっさりさせる 発表者の評価・聞き手の評価について説明する	
展開 36分 10	「月と兎」についての生徒発表 ・日本人は「月には兎が…」というイメージがあるが、いつ・どこで・なにからそのイメージは生まれ、今日まで伝わったかを述べる  発表者以外の聞き手の生徒 ・上記の問題意識をもって聞き、プリントに整理をする  8 10 質疑応答 「今昔物語」についての生徒発表 ・説話集の文学史的位置付けと今昔物語の性質について述べる  発表者以外の聞き手の生徒 ・国語資料の基礎知識の習得をする 8 質疑応答	発表者への留意点 ・発表の要旨ははっきりしているか ・原典からの引用がされたか ・誤読された語彙は訂正する  聞き手への留意点 ・聞きながらプリントに整理できているか  8 10 応答の援助と問題点の抽出をする 発表者への留意点 ・文学史的整理ができているか ・今昔物語の解題を理解しているか(説話の伝承性に言及したか) ・月と兎との関連は念頭にあったか ・誤読された語彙は訂正する 聞き手への留意点 ・聞きながらプリントに整理できているか 8 応答の援助と問題点の抽出をする	発表者の評価 【関心・意欲・態度】 ・発表レポート 【話す・聞く能力】 ・ワークシート   聞き手の評価 【関心・意欲・態度】 ・ワークシート ・発表後の質問 ・ワークシート
まとめ 7分	指導者からの発問により、発表の典拠・資料収集方法について、発表者は答えられなかった視点について全員が考える	【発問】 発表の主旨となる典拠資料は何か  発表のよかった点をほめた後に、不足していた点を補足するための発問をする	

導入 5分	前時に行った活動、学習を確認する	発表の過不足の整理と、問題点の再認識を「なぜ月」と兎を連想するのか」	
----------	------------------	------------------------------------	--

<p>展開 30分 15</p> <p>「学習資料」が配付される</p> <p>学習資料の読解と空欄の補充 ・『今昔』巻五第13話の読解 ・典拠の考察をする ・時代的考察をする</p> <p>今昔と同類話との相違点に注目する</p> <p>10 『今昔』の話の良さを考える ・「月見」という語に注目する 月と兎以外の連想をする ・「月見」への連想 ・日本と中国の違いを知る</p> <p>5 学習資料への記入</p> <p>他文学に見られる月の考察をする 基本的な文学史の確認をする</p>	<p>「学習資料」についての説明をする</p> <p>問題点の解答のための視点は 『ジャータカ』 『今昔物語巻五第13話』 『良寛詩』 などにあり、それが伝承されたことを理解させる（発表者の内容によって切り口は変わる） 【発問】今昔物語の評価は？ 学習資料の空欄部の板書をしながら上記を補足するための【発問】 「月見はいつ行つ行事」 「その習慣はいつからだろう」 （観月・観賞池） 「どんなものを供えるか」 「その意味は？」 その他の国語資料と言語事項 『竹取物語』『古事記』『楚辞』 「かくや姫」「月読神」「桂男」 「兎・兔・免・卯」「月の異称」 （詳細は学習資料を参照）</p>	
<p>まとめ 15分</p> <p>ワーク・シートの〔感想〕欄の記入後に提出する</p> <p>次回の発表者が申し出る</p>	<p>ワークシートの完成を促し、〔感想〕欄の観点について説明する</p> <p>本時を受けて、次回の発表課題を提示し、発表者を募る</p>	<p>【知識・理解】の評価 ワークシートの感想欄 学期末考査</p>
<p>補足 我々は「月」というと「兎」「餅つき」といった連想をするのはなぜか、という疑問を教師が投げかけた。生徒が発表をした。生徒は今昔物語集の巻五の第5話を見付け、「帝釈天である老人を養うために奔走する兎が、何も食べ物を集められないために、我が身を火に焼きささげた。その兎を帝釈天が月に移した。万民は月を見る度にこの兎を思い出す。」という由来を紹介した。教師は、『ジャータカ』『大唐西域記』といった今昔物語集の同類話を資料として示し、校異・変容を確認し、思考を深めさせ、また「月見」「餅つき」「望月」へと広めさせた。そういった実践のなかで、生徒の興味関心、反応を見取り、その授業から歴史的、内容的なつながりをもとに次の題材を決定していった。</p>		

### (3) 単元に共通のテーマ

生徒の研究発表では、毎回ワーク・シートを配り、発表内容のまとめと発表の感想を記入させ、提出させた。「～なんて知らなかったが、今日はためになった」「～には感心した」「とてもよく調べてきてよかった」といった感想が、当初はほとんどであった。やがて、前時との比較や今後の課題について言及するものが多くなり、年度末の授業で「日本文化とは何だと考えるか」という問いに対して、次のような文章で答えてきた外国人生徒がいた。

「文化」を一言で言うことはとても難しい。ある国の文化というのは、たくさんのルーツがあって、そこから様々な変化を経て、その国の文化になるのだと思う。日本の文化も周囲の国から伝えられた物事が、長い年月にわたって形を変えて今に伝えられている。その一番の特徴は、「こころ」であると思う。多くの歌や、説話などすべてに「こころ」という重要な要素が含まれている。「こころ」で感じたことを文字にし、言葉にし、それを聞いた人は、また「こころ」で感じ取り、解釈する。こうしてみると日本の文化は以心伝心の文化であると考えられる。心で感じたことを別の人もまた同じように感じるという、すなわち今の人々がいう「同感」という言葉が似ている。常に人と共に生きるということがこころにあり、人と同じようにしたがる場所がある。また、和歌は本当に美しいと思う。やはり文化のルーツが同じだからなのか、不思議なことに和歌を読んだとき、私も理解でき、どこかこころが通じ合っている気がする。これが歌のもつ力であり、そうであるからこそ長い時を経て消えることなく、今の私たちに伝わってきたのかもしれない。

この一年間の授業の中では、年度当初をのぞき「文化」という言葉を意識して使わなかった。「桜」や「和歌」や「説話」などの題材から生徒が何を感じるか、それらを通して何が見えてくるかが肝心であると考えた。そもそも「日本の文化はこうである」と教え示すものではなく、生徒が気付くものではないか。先の文章は、日本人でなくてもここまでの理解がされたということと、日本人ではないからこそ「日本」「和歌」といった言葉と真剣に向き合っただと学んだのだと感じた。日本の文化を学ぶことで、現代の日本人が失っているものを取り戻し、あらためて日本人になるとはいえないか。そのために、漢字から仮名へ、梅から桜へ変わる時代と人、「浦の苦屋の秋の夕暮れ」に浮かんで消えた「花」と「紅葉」の余情美を詠んだ歌人、その歌人の心をひたすら追いつけた後世の連歌師、猿楽師、茶人、それらを説話として伝えた説話編纂者、といった今に伝わる古人の言葉からその「こころ」を読み取ることが、単元に共通するテーマであるとし、年間の単元を構成した。

## 2 研究の成果

### 「日本文化」年間授業計画案（平成 17 年度）

日本文化	単位数	2 単位	学科・学年・学級	国際科 第3学年 6組	
学習の到達目標	1 現代人の心の深層にある文化の起源を明らかにし、そこから今日までの伝承経緯を、原典を通して読み取ることによって、ものの見方、考え方を深める。 2 資料収集とそれを解釈する能力を身に付けることで、言語理解の奥深さを知るとともに、古の日本人の心象表現を理解することによって、日本の文化に対する認識を新たにする。				
使用教科書・副教材	自主教材・新訂総合国語便覧（第一学習社；入学時購入済）				
学期	単元名・学習内容	月	学習のねらい	備考 文献資料の使用など	評価の観点 のポイント
前期	一 はじめに -文化とは-		文化考察の切り口を見いだす		
	1 授業形態について	4	・課題発表・学習基礎資料の利用の仕方を理解する	発表レポート・ワークシート	
	2 文化と文明について 3 様々な文化のとらえ方	4 4	・文化、文明の語源をつかみ、同義・異義語の理解をする ・文化の切り口による様々なとらえ方を考える	辞典類各種	
前期	二 自国意識の芽生え		日本・日本人という自国意識をさかのぼってとらえる		
	1 日本という国号について		国号そのものを切り口としてとらえる	古事記・日本書紀	
	・日本書紀と古事記	4	・記紀それぞれの編纂意識から、国号の起こりを考える	続日本紀・新旧唐書	
	・続日本紀と唐書	5	・日本書紀以前の日本という表記を確認する	大宝令・浄御原令 他	
	・浄御原令と日本	5	・諸説の検討を踏まえ、国号の起った時代を想定する		
	2 桜について		国歌桜を切り口としてとらえる		
	・万葉の桜	5	・万葉集の桜の詠歌、桜の表記の確認し、梅と比較する	万葉集・古今和歌集	
	・平安初期の桜	5	・南殿の梅が桜に変わった時代と記録を確認する	古事談・禁秘抄	
	・九重の桜	5	・物語文学最盛期の桜から平安貴族文化をとらえる	三代実録・拾遺和歌集	
	3 古今集成立について		和歌を切り口としてとらえる	拾遺集 他	
	・和歌のはじまり	6	・7世紀後半からの叙情詩の歴史を概観する		
	・勅撰漢詩集と勅撰和歌集	6	・漢詩集から和歌集の転換期の時代背景について考える		
・仮名文字と和歌	6	・仮名文字成立の背景と和歌の隆盛について確認する			
・仮名序と成立の意義	6	・古今集仮名序の意識について考えを深める			
前期	三 文化伝承の担い手の説話		文化伝承を伝承文学から考える		
	1 月と兎		今昔物語集の月と兎の話から伝承を考える	今昔物語集第五 13 話	
	・今昔物語集の月と兎	6	・今昔物語集の月とウサギから現代人の心の深層を探る	ジャータカ	
	・インドと中国の月と兎	6	・インド、中国、日本への説話伝承をとらえる	大唐西域記	
	・餅つきと望月	6	・話の転換と言葉の不思議さについて考える	法隆寺玉虫厨子	
	<u>前期定期考査</u>	7	既習事項の習得の確認と、そこからの考察の度合いを見取る	良寛詩 他	
	・答案返却とまとめ	7	・各単元を通じた整理と補足		
	・図書館学習	7	・宮廷絵巻、和歌色紙などの資料学習	源氏物語絵巻など	
【課題・提出物】 発表レポート、ワークシート、などの提出について ・毎時間の課題発表後、発表者はレポート提出 ・発表者以外はワークシートにて発表評価・内容のまとめ・感想の提出 ・言語理解のための課題提出					
【前期の評価方法】 考査評価、課題発表、課題レポート、課題ワークシートへの取組状況などを総合的に評価する					

後期	2 歌徳説話と古今集仮名序 ・宇治拾遺物語の歌の徳  ・宇治拾遺の同類話 5 話 ・古今集仮名序の歌の徳 3 定家と桜 ・古今著聞集の定家 ・藤原定家について ・花見の起源 ・源氏の桜と式子内親王	9 9 9 9 9 10 10	仮名序の前段と歌徳説話から、歌のもつ力について考える ・歌の徳で罪を許された話からの考察をする  ・説話、和歌集、歌論書との宇治の同類話を比較検討する ・仮名序の説く歌の徳と詠歌について 古今著聞集に描かれた定家を切り口とする ・南殿から八重桜を盗む定家を描く説話が語るものの考察・説話 に 描かれた時代の藤原定家をとらえる ・定家以前の桜とそこから定家が見たものを考察する ・若紫に描かれた桜や内親王の贈答歌について考察する	宇治拾遺物語 1 1 1 話  拾遺集・十訓抄 古本説話集・今昔物語集 俊頼髓脳・古今和歌集 他 古今著聞集第19-662話 日本後記・詞花和歌集 源氏物語・沙石集 他				
四	定家以後の中世芸能 1 定家の幽玄と花伝書 ・艶なる余情について ・中世和歌を貫く幽玄 ・世阿弥の花 ・定家と連歌師たち 2 定家詠歌と茶の精神 ・秋の夕暮れについて ・茶の道の侘び ・侘びから寂びへ	10 10 11 11 11 11 11	歌人定家の理念を継承する芸能家たちの姿をとらえる 花伝書にいう「はな」と定家の幽玄について考察する ・定家詠歌から余情幽玄をつかむ ・詠歌、歌論書の両面から中世の幽玄について考察する ・世阿弥の花伝書の「はな」について考察する ・定家の理念の継承と連歌への変遷をつかむ 幽玄から茶の湯の確立までをとらえる ・定家詠歌の後世の解釈を考察する ・村田珠光、武野紹鷗、千利休から茶道について考察する ・幽玄・侘び・寂びについて考える	花伝書・新古今和歌集 千載和歌集・新撰髓脳 天徳四年内裏歌合  新古今和歌集・源氏物語 八雲御抄・毎月抄 猿蓑				
五	和歌に現れる日本文化 1 俊成と定家、西行 ・俊成の幽玄 ・定家の花、再考 ・西行の花と月 <u>後期定期考査</u> ・答案返却 ・図書館学習 2 古今伝授にまつわる話 ・歌徳説話と格式 ・古今伝授の逸話	11 11 12 12 12 1 1 1	これまでの考察を詠歌から振り返り、まとめる それぞれの詠歌を比較し、その心を考察する ・公任・俊成の説く幽玄について考察する ・定家の桜について詠歌からの考察をする ・西行の辞世歌を中心とした考察をする 既習事項の習得の確認とそこからの考察の度合いを見取る ・各単元を通した整理と補足 ・中世絵巻などの資料学習 定家の子孫から始まる古今伝授から文化伝承を考える ・歌徳説話が古今伝授に至るまでを考察する ・東常縁や細川幽斎にまつわる話から考察する	千載和歌集 新古今和歌集 山家集・撰集抄 西行物語・宮河歌合  餓鬼草子、病草子  古今和歌集・尊卑分脈 正徹物語・新撰菟玖波集				
【課題・提出物】 課題小論文及び前期に準ずる								
【後期の評価方法】 前期に準ずる								
評価の観点及び内容（各単元共通）						評価方法		
関心・意欲・ 態度	発表のテーマに関心をもとうとしているか。 発表のための資料を積極的に集めようとしているか。 授業の内容や発表から文化に対する見方を深めようとしているか。					・学習活動に対する参加態度 ・発表ボード・発表ワークシート		
話す・聞く能力	発表の主旨を理解するために、的確に聞き取ることができているか。 問題意識をもち、発表の主旨を強調することに注意して話すことができているか。					・発表ワークシート ・課題発表		
書く能力	具象から抽象へ、またその逆の思考について、簡潔にまとめることができているか。 文化に対する自分自身の考えを整理して述べることができているか。					・課題小論文		
読む能力	原典の解釈とその歴史的背景をとらえて、資料を正確に読み取ることができているか。 資料の中に、文化を考える鍵となる言葉を見出すことができているか。					・課題発表・発表ボード ・発表ワークシート		
知識・理解	文化的なものの見方につながる言語知識を理解し、原典の解釈や語源の知識を深めることによって、歴史の中で文化が生成し、伝承されたことを理解しているか。					・定期考査 ・課題小論文		

## 研究のまとめ

本研究において 15 年度の課題を念頭に、16 年度の授業実践を踏まえ、どのような意図で単元開発がされたかを整理し、まとめとする。

自国の文化の特性をはっきりと見取ることができる題材

単元の「日本という国号について」「桜について」「古今集の成立について」に、最も自国文化の特性があらわれており、それぞれが他の単元につながるようにした。

歴史的時代背景を意識しながら、日本の文化を見つめられる題材

一から五の単元の流れから、飛鳥浄御原から室町までの時代の変遷がわかるようにし、和歌・説話を題材にして、特に時代の変わり目に注目した。また室町文化までたどり着くことが、年間の授業時数の限度であり、室町以前と以後で見えてくるものは違うように感じた（特に五の2から）。

様々な知識の切り売りになる面があり、一つのテーマで日本の文化を見取る題材

それぞれの単元に登場する人物のところが、すなわち日本の文化であるととらえられるように、また、後生は先達のところを追い求めたということが理解されるような単元構成とした。

## 今後の課題

今後の課題は山積しており、整理のために箇条書きとする。

- ・作成した年間授業計画案にそった実践を行い、どのように日本の文化が見えてくるか、授業検証をすること。
- ・歴史的背景の検討とともに各単元の題材をさらに精選し、作成した学習資料を充実させること。
- ・単元のなかで「月」「花」には言及したので、「雪」についての単元を開発すること。
- ・評価規準を他の国語科の科目と比べ、適正であるかを見直すこと。
- ・新出の参考文献を精読し、活用すること。
- ・原典の解釈、同類話の校合などは繰り返し行うこと。

最後に、研究を進めるに当たり適切なご指導をいただきました先生方、研究にご支援、ご助言をくださいました所属校の校長先生をはじめ、教職員の皆様に心より感謝し、厚くお礼申し上げます。

### 【参考文献】

山田孝雄	『櫻史』講談社学術文庫	1990年
鈴木日出男	『古代和歌の世界』ちくま新書	1999年
高森明勅	『謎とき日本誕生』ちくま新書	2002年
中西進	『日本文学と漢詩』岩波書店	2004年

### 【指導助言者】

川崎市総合教育センター指導主事

佐藤 裕之